

近世本草学の「実学」基盤

謝 蘇杭

はじめに

◎近世本草学の時代区分と「実学史観」導入の必要性

本草学は、古くから漢方医学とともに日本に伝来していたが、1607年林羅山によって本草学の画期的大作『本草綱目』が日本にもたらされ、それをきっかけに日本本草学の多彩な展開が始まったのである。このユニークで多面的な展開を遂げた近世本草学史を描出するにあたって、多くの本草学研究者はさまざまな視点から近世本草学に対する時期区分を試みた。

たとえば、木村陽太郎は『日本自然誌の成立—蘭学と本草学—』において、江戸時代日本における蘭学の発展の諸段階に依拠して、それと合わせた近世本草学の発展を三つの時期に区分しようとした。第一期は、オランダのリーフデ号が豊後に漂着した1600年に始まり1715年まで、第二期は、吉宗が将軍となった1716年から1822年まで、第三期は、シーボルトが来日した1823年から幕末の1867年までとしている。¹

木村氏のこのような近世本草学に対する時期区分は、本草学における蘭学の受容について検討する際に、または東西博物史対比研究の際に、確かに一つの参照基準となり得るかもしれないが、江戸時代における本草学者たちの主体性および近世本草学の独自の展開における豊かな内的変化と論理性を究明する際には、まだ十分に適切な時期区分とは言えないのである。

また、岡西為人は『本草概説』において、慶長八年(1603)から慶応三年(1867)までの江戸時代を、前・中・後の三期に分けて検討を加え、各時期の時代背景とそれが本草学にもたらした影響、および各時期における本草学の特徴を分析した。岡西氏の本草学時期区分において、前期として扱うのは東山天皇が譲位された宝永六年(1709)までで、この最後の年に幕府では五代将軍綱吉が亡くなり、家宣が将軍の職に就いている。中期は中御門天皇の宝永七年(1710)から後桃園天皇崩御の安永八年(1779)に至る六十九年間である。後期は光格天皇即位の安永九年(1780)から慶応四年(1868)の大政奉還に至る八十八年間である。²

岡西氏の本草学時期区分は一定の客観性を有しており、そこに各時期の政治傾向、社会状況が明晰にみられる。その背景にある本草学分野の変化や、本草書流通状況なども、客観的に見て取れる。しかし、岡西氏がこのような時期区分法を用いて解明しようとする対象は薬学的本草学であり、近世本草学における重要な側面である博物的本草学の検討に際しては、このような時期区分法は十分に適切であるとは言えない。また、このような時期区分法は、本草学の発展における洋学受容の影響をほぼ完全に見逃している。

以上に挙げた木村氏と岡西氏の本草学に対する時期区分は、ともに本草学の外に立って、外部的要素を重視した客観的時期区分法で、本草学の歴史を推進する主体としての本草学者の思想に対する関心は低いと言わざるを得ないのである。

このような従来の本草学史に対する時代区分の欠点を克服するために、また、本草学史研究に新たなパラダイムを提供しようとして、筆者はここで、あえて源了円氏の「実学史観」という視点の導入を試みたい。日本の「近代化」＝「西欧化」としてとらえ、近世後期以降の思想展開を内面的には捉え得ない「近代主義」とは異なり、源氏の「実学史観」は、儒教文化圏において、人間が物質的・社会的環境を統御する「目的合理性」を追求す

¹ 木村陽二『日本自然誌の成立—蘭学と本草学—』中央公論社、1974年、9頁。

² 岡西為人『本草概説』創元社、1977年、390頁。

る学問は朱子学を出発点としてその変容・修正・批判のうえに展開した実学思想であったと評価した。³

江戸時代の文化、産業および科学技術などを検討する際、江戸時代の思想の主軸である儒学思想の検討を離れてはいけない。そのなかに潜む実学思想が、江戸中期における科学・技術学の生成や、幕末から明治維新に至る近代化過程に計り知れない影響を与えていたからである。江戸時代に中国の伝統本草学と決別し独自の発展を遂げた日本近世本草学も、例外ではない。近世本草学の発展の軌跡は、江戸時代の実学思想の発展段階と、一致した傾向性が見られるということを筆者はここで強調しておきたい。

経験科学である近世本草学の発展は、確かに中国からの学知の継承と、洋学の受容がその変革の要素であるが、「漢学」―「洋学」という二元構造の狭間に立つ本草学者の軌轢や葛藤、取捨選択こそが近世本草学の前進の直接的な動力源ではないか。よって、近世本草学家の思想、特にその実学思想に対する検討は極めて重要なのではないか。

一方、近世本草学の近代化過程を究明するにも、このような「実学」の視点を欠かしてはならないのである。洋学の受容は確かに日本近世本草学の発展に大きな変革をもたらし、その学科の近代化まで導いたのだが、そのような視点のみでは、近世本草学生成と発展の自発性・独自性、および本草学者たちの主体性を見逃す傾向がある。従来の本草学史の研究は、そのような陥穽に落ちることが多かった。源了円氏が述べているように、確かに王政復古による中央政府の樹立が日本の近代化への本格的な歩みをはじめて可能にしたことは間違いない。しかしこれでは何のために変革運動がおこったのか、ということの説明もつかないし、また日本の明治以降の急速な伸展の内在的原因も明らかにならない。欧米の先進諸国の巧妙な模倣、ということだけでは日本の急速な近代化の原因を説明したことにはならない。われわれは主体の側の原因にも着眼するべきであり、そしてわれわれの視野は徳川時代以来の歴史的蓄積にも拡がるべきである。⁴もし私たちは源氏が言っているように、「主体の側の原因に着眼」し、近世の「歴史的蓄積」を考察すれば、近世本草学と明治の近代諸学科の間には、一つ明晰な線が段々と見えてくるでしょう。例えば、享保期吉宗の殖産興業策の延長線として、近代の物産学的な殖産興業が成り立っている。江戸期に博物趣味で愛好者が集まる本草会は、明治以降になって殖産興業志向の勸業博覧会へと自らの進化を遂げた。また、本草学者の知識に対する態度の変化は、江戸期本草図譜と明治以降本草図譜の描き方の変化において直観的に反映されている。それらの本草学分野で推し進められた近代化の流れのなかで、「実なるもの」とはなにか、「虚なるもの」とはなにか、という問いに対して、本草家たちは常にその内面に照らして取捨選択し、「実学」を常に時代の主要なる課題として引き受けながら、本草学の発展を内側から基礎づけていたのである。

◎源了円氏の「実学史観」による近世の時代区分

源了円氏は『近世初期実学思想の研究』において、日本における実学思想の展開を四つの時期に分けることを試みた。第一期は、近世初頭の藤原惺窩から荻生徂徠の出現に至るまでの江戸前期としていて、第二期は、荻生徂徠から会沢正志斎の思想活動の始まる1820年代頃までの江戸後期、第三期は、1820年代から明治維新にいたるまでの時期、第四期は明治以降としている。⁵

源氏によれば、この四つの時期における実学思想の特徴は著しいものである。第一期の特色は、人間の内面における真実への追求がその出発点と着眼点となっていて、それがを

³ 本郷隆盛、深谷克己編『近世思想論・講座日本近世史9』有斐閣、1981年、26頁。

⁴ 源了円『近世初期実学思想の研究』創文社、1980年、188頁。

⁵ 源了円『近世初期実学思想の研究』創文社、1980年、91頁。

経世済民につながることで人間にとっての真実が達成する、ということをして「実」とする、という人間の内面性を基調を置く実学である。

第二期の江戸中後期の実学の最も大きな特色は、第一期と一変して、人間の内面に対する究極的真実の追求から離れていったことであり、実学者たちの関心が内面的なものから外面的なものに移ったことである。当然、第一期の実学においても外面的な世界に対する関心はないわけではないが、その外面的な世界に対する関心は、詳細に探っていくと、実は内面的な自分の心の延長として「心」と連続的にとらえられていたのである。しかし第二期においては、実学者は自分の志向性を内面の心的要素から切り離し、外面的なものをそのまま外面的なものとしてとらえる実学的志向が現れて来る。

続く第三期の実学は、揺らぐ江戸社会の社会を背景に、国家の危機、社会の変動に対処する、一種の実践的傾向をかなり強く持つようになる。

最後に現れる第四期の実学は、近代の実学である。具体的な定義としては、実証的・合理的方法に立脚して、われわれの生活の役に立つ学問、という意味である。ほぼ今日の実学の意味に近いたちで定着している。またその性質上、肝心な点として注目すべきは、この時期の実学は、支配者と被支配者との先天的関係を前提として、支配者が被支配者のために配慮するような経世済民の実学ではなく、人民の社会生活に有用な実学であるということだ。

筆者は、源氏の日本実学史に対する時期区分を近世本草学史に援用し、近世本草学史に対する時期区分を再考するとともに、各時期に特有の実学思想を、その時期に活躍していた本草学者の思考様式・学問において検証しようとするものである。本草学者の実学思想あるいは実学性格を本草学史に沿って検討し、最終的に実学史観から見る近世本草学史の実学的系譜を描出することを目指している。

一 近世前期本草学の「心学」的実学性格

実学史観から日本近世史を検討すれば、近世前期の実学、つまり源氏による実学的時代区分の「第一期」は藤原惺窩から荻生徂徠までとされている。⁶この期の実学、つまり徂徠学成立以前の実学思想の特徴は、伝統的な朱子学の立場に立ち、排仏論を唱え、仏教や老荘の学における彼岸主義を否定し、「実なき」ものとする一方、朱子学における「理」を実理・実義とし、「明德親民之実学」と考えている。それゆえ、この時期の実学思想は、人間の内面における真実への追求がその出発点となっていて、それを経世済民につなげることで人間にとっての真実の達成を「実」とする、というように人間の内面性に基調を置いている。いわゆる、一種の「心学」的実学である。この期の実学の特徴は朱子学の性格にあるというものの、先験的な理を重視する（先験的合理主義）実学者と経験的な理を重視する（経験的合理主義）実学者と、という二つに分けることができる。これも、朱子学における「居敬静座」と「格物致知」という二つの側面である。源氏によると、日本の場合、この二つの朱子学の傾向が相拮抗する勢力関係にあった。⁷しかし、寛文頃にいたると、古学派の台頭や農業技術の発展、町人文化の発達などの社会的条件を原因として、近世初頭の先験的な傾向が強い朱子学も次第に批判され、先験的な理を追求するより、経験的な理への追求が重んじられた。⁸

日本実学思想史にこの経験的な理の追求を主とする考え方の礎石を置いたのは林羅山である。そして、彼が経験的な理を追求する媒介はまさに本草学である。形而下的な個物における経験的な理を重視する「格物致知」の思想は、本草学の学知とより適合であった

⁶ 源了円『実学思想の系譜』、講談社学術文庫、1986年、69頁。

⁷ 源了円『実学思想の系譜』、講談社学術文庫、1986年、70頁。

⁸ 源了円『近世初期実学思想の研究』創文社、1980年、92-93頁。

からなのだ。近世前期の本草学は、「格物致知」の実践の場として、独自の展開を迎えた。

1607年、林羅山が長崎で中国の書籍を購入する際、たまたま李時珍の『本草綱目』を入手することができた。羅山は間もなく、『本草綱目』から漢名を抜粋してそれに万葉仮名による和名をそえた『多識編』を編み、1612年に成稿した。『多識編』という書名は、『論語』陽貨篇にみえる「多ク鳥獸草木ノ名ヲ識ルベシ」から採ったものといわれる。⁹本書の内容から見ると、羅山の関心は、漢名の動植鉱物は邦産の何に当たるのか、またそれに対していかなる和名をあでるべきかという点に集中していた。つまり、事物とその名称を正すこと——古来、名物学と称されてきた分野にあった。¹⁰羅山の『多識編』に宿った名物学的傾向は——これも経験的な理への追求、つまり「格物致知」の一種の延長として考えられるが——近世前期本草学研究の気風を支配し、中期の小野蘭山にいたって集大成となり、幕末までその影響が続いていた。

林羅山の『多識編』をきっかけに、本草学は、儒学者や本草学者が経験的な理を追求する実験台として、朱子学の「格物致知」という人間内面の「真実」を通達させる媒介となった。このような「心学」的実学を実践している代表的な本草学者として、17世紀後半では、二人が挙げられる——稻生若水と貝原益軒——この二人はそれぞれの立場に立って、本草学における「格物致知」の実学的実践を行ったのである。

まず、稻生若水は林羅山の本草学傾向を継承し、名物学的本草学研究を行った。若水の名物学的本草学研究を一番表しているのは、彼の主著『庶物類纂』である。『庶物類纂』は日本におけるすべての産物を各種ごとに、幕府および若水自分の膨大な中国古典文献を多数引用し、その名実を考証するもので、浩瀚な分量を持っている。若水はもともと千巻まで計画したけれど、残念なことに正徳五年彼が亡くなるまで三百六十二巻しか完成できなかった。中には、草・木・果・味・花・鱗・介・羽・毛（獣類）の九属の千八百八十余種が記録されている。¹¹本書の序文には、名物学的本草学研究の三つの必要性がアピールされた。一つ目は、名物学は物事物の名を正す学問として儒教の「正名論」とつながっている。本草家にとって、「名物学」は「君子之学」であって、物の名実を正すことは大義名分を正すという使命なのである。本草家は、物を網羅的に集めている本草書という一番いい媒介物を持っているので、当然その様な使命を自ら担わなければならない。二つ目は、本草書に載っている品物にも地域の方言や考証の混乱によって間違いが多く、処方でミスが出たら命を脅かす危険性がある。よって本草書に対する名物学上の考証は至急の仕事ともいえる。三つ目は、従来の本草書は、薬材だけを載せ、それ以外の天然物を載せないの、専門的「方術書」にすぎず、「格物致知」「窮理」「正名」などを論じるにはまだ足りない。

その三つの必要性を述べたうえで、若水は三つの立場に立って、名物学的本草学の意義を説明した。まずは、本草学者の立場から見れば、薬物に対する名物学的研究は、薬性と効能などを講ずることに先行する基礎作業である。処方で薬物の名称が誤った場合、命を脅かす危険性がある。次は、儒者の立場から見れば、本草学は医学の一部というより、むしろ「君子之学」として「格物致知」との結び付きが強い。本草学は「君子之学」と「格物致知」を完成する一つのルートとなっている。最後に、古学派（古医方）の立場から見れば、これは「理気説」を受けている後世方医学に対する批判でもある。「性理気による発病」——「それに相応する薬性をもつ処方」という二元構造を打破し、形而上的な理と気の重視から、形而下の薬品の個物に対する重視への変革を促している。

若水の名物学的本草学における実学性格は、以上からもうかがえるが、一種の「正名」

⁹ 西村三郎『文明のなかの博物学—西欧と日本（上）』、紀伊國屋書店、1999年、108頁。

¹⁰ 西村三郎『文明のなかの博物学—西欧と日本（上）』、紀伊國屋書店、1999年、110頁。

¹¹ 木村陽二郎『江戸期のナチュラリスト』、朝日新聞社、1988、52頁。

—「名物」—「本草」という重層構造になっている。言い換えれば、名物と本草の関係を医家の先決の実務として受け取る一方、同時に本草という基盤を媒介として、名物的名実考証を通じて、物事の名実を正し、最後に「正天下」となり「格物致知」に至る、という構造である。哲学的正名論とつながることを通じて、医学の傍流である伝統本草学は初めて朱子学の「格物致知」の実践の場となったのである。

しかし一方、名物学的本草学の欠点も明らかである。まずは、中国典籍の考証を中心としていて、実地での採集や観察が少ない。後世の本草学家のように十分な観察と実験を徹した厳密な実証的基盤の上に立っていない。また、名物学的本草学における「格物致知」の焦点は最終的に自分の内面に帰結し、従来の朱子学と同じ思考モードに沿っている。その原典考証を重視する書物中心主義の研究方法は、民間まで浸透しうる通俗性と啓蒙性を欠けているのである。

名物学的本草学の以上の欠点を克服したのは貝原益軒である。益軒の本草学上の業績は、言うまでもなくかの有名な『大和本草』であろう。『本草綱目』は日本に伝来してから百年の積み重ねを経て、益軒によって日本初の独創性のある本草・博物著書——『大和本草』が世に現れた。『大和本草』は『本草綱目』 所載の1800余種の中から日本にないものあるいは曖昧なものを除いて772種をとり、また他の本草書から203種を選び、新たに日本の特産358種、オランダ・南蛮からの渡来品29種を加えて計1362種の産物を収録したものである。¹²

益軒は江戸前期有名な儒学者として、彼の本草学における実学思想は、朱子学における「理」という概念に対する検討から見られる。彼は朱熹のように、理を三つに分けて、それぞれ「形而上の理」「物理」「道理」としている。そのあとの両者は、益軒が自分の本草学研究に、強く重要視しているのだ。彼の本草学は、「物理」と「道理」の間に成り立っているともいえる。「物理」は、いわゆる物の中に含んでいる理で、それを得る手段として、「格物」がまず必要だ。そして「博学」「審問」「慎思」「明弁」などの態度をもって、「究品物」「通性理」「考是非」「正謬誤」「分真偽」「辨同異」、最後に「極広博致精密」に到達し、「格物致知」となる。「道理」は、いわゆる人間界の礼法で社会の倫理関係である。また、「道理」と「物理」の関係は、益軒から見れば、人がもし世間萬物の「物理」を認識し悟ることができたら、自らの中におのずと「道理」が生まれ、仁となる。

益軒は以上のように、朱子学における三つの「理」（形而上の理、物理、道理）に対する理解を踏まえて、自分の実学を作り上げた。彼の実学観は、あくまでも道徳的实践（道理の实践）が中核となっているのだ。益軒にとって学問（本草学もその中の一つ）の最終目的は「用を済む」ことであって、民生日用と経世済民に役に立たなければならない。そしてその目的を達成する手段として、「格物」を通さなければならない。つまり、物の理を一種の経験主義的実証主義的な学問態度を踏まえて窮めることである。ここで、益軒の「物理」に対する重視は先決的で、手段としてとらえるのだ。益軒の『大和本草』の構成や分類体系などにおいて、そのような「格物」への重視と経験主義的実証主義的な学問態度が著しくうかがえる。

総じていうと、益軒の本草学の実学性は、三つのレベルでの「虚」と「実」の弁証的關係に帰結することができる。一つ目は、見聞少ないことや見聞をみだらに信じる傾向、医学・本草学研究の思弁上に流れる傾向、または『本草綱目』を聖典化する傾向などを「虚なる」ものとし、先説に対し批判的な目線を持って経験主義的実証主義的な研究態度を取ること。二つ目は、朱子学理気論上の空理空論を用いて、薬物の薬理薬性に対し統括的な説明解釈を下すではなく（「虚」）、第一レベルの経験上実証上の研究を踏まえた上、個物に対する合理性を抽出すること（「実」）。三つ目は、世間萬物に対しその理を

¹² 西村三郎『文明のなかの博物学—西欧と日本（上）』、紀伊國屋書店、1999年、122頁。

窮め、それを「自分の心に対する理」として受け止めることなく（「虚」）、物理を窮め、天地創生の究極的な理とつなげることで、仁を悟り、世間に愛を実践する。つまり経世済民、民生日用を重視することである（「実」）。

若水にせよ、益軒にせよ、近世前期の本草学者はその思想的な側面から見ればやはりまだ自分の内面から出し切れず、彼等の本草学研究の志向は、最終的に自分の内面に帰着し、「人間の真実への追求」と「道徳的实践」を目的としている。しかしこの両者は、「実」に対するそれぞれの認識に基づいた実学的思想をもって本草学研究に臨み、自らの実学を実践し、批判的な態度で中国から伝来した伝統本草学に自分の独自の要素を加味した。彼らのそれぞれの研究成果や学術方法は後に継承され、近世本草学これからの多彩な進化の鍵となったのである。

二 近世中期本草学における「実学の転向」

貝原益軒の『大和本草』の刊行から吉宗の登場による物産学的本草学の展開まで——この両者の間が近世前期の本草学と近世中期の本草学の分け目として認識されるのは本草学史に対する一般的な見方である。筆者も一応そのような本草学史に対する時代区分を認めているが、もし「実学史観」の立場に立ってこの両者を検討すれば、近世中期の本草学は、近世前期の本草学に対してその「実学」の意味の転向によって成り立ったものとして理解することができる。そしてそのような「実学の転向」を導いた大きな思想的背景は、江戸時代中期の徂徠学の成立である。徂徠は、ある一つの価値観に立って書かれた朱子の『資治通鑑綱目』を実学ではないとし、事実を事実として書いた司馬光の『資治通鑑』を実学的著作とする。それによって江戸前期のなんらかの価値観に立脚して成立している実学を全面的に否定したのである。その否定によって、人は自分の内面に対する「実」への追求から主観的な価値観の影響を除去した客観的な外面の「実」に移った。本草学もその後、これまでずっと中国から伝来してきた本草学の中に帯っている朱子学の世界観を離れ、「現実」に立脚した本草学への発展を開始したのである。

源了円氏は『近世初期実学思想の研究』において、江戸中期学問の実学の転向は主に以下の三つの学問的・社会的現象を引き起こしたと主張している。¹³

一つ目として、この時期の学者たちは、中国の学問や思想に対する理解はすでに非常に深まっている状態に達している。彼等は中国からの学問や思想を消化し、自らの武器として自由に使い、ある状況において自己に課せられた課題をそれによって解くという自主的態度が形成されたということである。

二つ目は、地方における学問の興隆である。江戸中期になっても、学芸の中心部となっているのは相変わらず江戸と京都であるにもかかわらず、その両者の相対的地位が変化し、江戸前期における京都の江戸に対する優越的關係が変わって江戸が京都に対して優位を占めるに至った。その一方、地方の文化は、地方の経済力の向上や交通網の発達、藩校を拠点とする地方学芸の興隆、または有力な学者が地方にとどまって教育に従事したことなどによって、江戸・京都などの大都市に対して相対的地位がこの時期に非常に高まっていた。

三つ目は、庶民階級への学問の浸透である。江戸前期の庶民層における文学・美術方面の流行に引き継いで、江戸中期では、さらに庶民層での学問方面の興隆が注目される。この時期の学問・教育上の最高位の一つを占めた大坂の懷徳堂は大坂の町人たちの手によって作られた学校であり、そこから富永仲基、山片蟠桃などの有名な学者が輩出した。また、農民出身の石田梅岩は中小企業の町人たちを相手に、町人の哲学を説き、貧農出身の二宮尊徳は農民に対して社会福祉の道を説いた。そのほか、庄屋たちは、国学のイ

¹³ 源了円『近世初期実学思想の研究』創文社、1980年、95頁。

デオロギーとともに、利用厚生の実学を学び、民生に供しようとした。

江戸中期の学問上・社会上のこのような変化と並行して、江戸中期の本草学も以上の三点と合わせた発展変革の動きがみられる。

まずは中国の学問や思想に対する消化と応用について、江戸中期の本草学研究領域では主に二つの大事件から現れている。その一つは、本草学者小野蘭山の『本草綱目啓蒙』による中国伝統本草学に対する総決算である。『本草綱目啓蒙』は蘭山の代表作であるのみならず、江戸前期本草学研究の最高峰である貝原益軒の『大和本草』に続いて、江戸中期における日本本草学研究の最高峰ともいえ、日本本草一博物学のある意味での総決算とも称すべき作品である。『大和本草』と同じく李時珍の『本草綱目』の基盤を受け継いだとはいえ、蘭山の『啓蒙』は、彼の50年近くの研鑽の成果として、品目の方言名、邦産の有無、新しく入ってきた西洋の植物の情報などを、慎重で実証主義的な姿勢で詳しい考証を経て、本書の内容に盛り込んだもので、この時期の博物誌研究の集大成ともいえる。

もう一つは、小野蘭山が属する日本本草学研究の正統派ともいわれる京都本草学派に対し、幕府の政策と緊密な関係を持った江戸本草学派はこの時期、吉宗の殖産興業策とともに、台頭した。江戸本草学派は、中国典籍に対する考証を中心に本草学研究を行う京都本草学派と違って、実践的・行動的であることが特徴だった。朝鮮人参など重要薬種の国産化および国産生薬の新たな開発、甘蔗の栽培普及などを含め、吉宗の殖産興業策の波に乗ってこの時期でたくさんの成果を挙げた。特に、江戸本草学派の中代表人物である平賀源内は、五回にわたり「東都薬品会」を開催し、五回の薬品会の出品目録として『物類品鑑』という本を刊行した。形式上的には単なる東都薬品会の出品カテゴリ一だが、実質的に本書は、その分類体系や品目についての記載などにおいて、中国から伝来した伝統本草学、特に従来の日本本草学研究の基盤になっていて、「聖典」として仰ぎられてきた『本草綱目』に対して、批判的な論説が所々に散見し、本書の全体的に「聖典」である『本草綱目』の権威への挑戦という姿勢が見えてくるのである。

続いて、以上の二つ目の「地方における学問の興隆」について、この時期において、正統派本草学の研究中心地である京都、および幕府支配の下で本草学研究を展開する江戸のほか、尾張、美濃などにおいても、自発的に本草学の研究団体が現れてきた。尾張藩は幕府が打ち出した殖産興業策を忠実に遂行し、藩内で大規模な薬園の経営や朝鮮人参の栽培などを熱心に試みた。また、藩士の間に園芸などの博物趣味が流行り、数多くの本草家、園芸家および画家が現れた。尾張本草学研究の中心団体は「嘗百社」で、その中心人物は蘭山の門人である水谷豊文である。水谷豊文は「嘗百社」を中心に、「時時集會シ、藥物其他種種物品、臘葉等ヲ袖ニシ來テ、互ニ鑑訂シ、其説、中不中ヲ競ヘリ」あるいは「時時本草諸書ヲ會讀シ、和産有無、各自ノ發見等、相謀リテ鑑定セリ」¹⁴など、盛んに本草学研究を行っている。また、豊文は藩医浅井貞庵の依頼で藩薬園を経営し、そこで全国各地の採薬活動で採った植物を薬園で栽培し、親試実験をする。尾張本草学派の本草著作から見れば、その内容は京都本草学派の影響が著しく見えてくるものの、そのなかに潜む実証主義的な傾向と蘭学に対する積極的に取り入れる姿勢がその一番はっきとした特徴である。

美濃本草学研究は尾張本草学と比べて比較的に後進だというべきだが、蘭学を一番熱心に摂取したため、日本本草学の各学派において一番初めに伝統本草学を近代科学の軌道に載せたともいえる。特に美濃本草学者の代表人物である飯沼欲斎が著した『草木図説』は日本最初の近代科学の植物図鑑といわれる。

¹⁴ 伊藤圭介：『尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雜記』、『錦窠翁九十賀壽博物會誌・上』、名古屋愛知博物館、1893年、93-94頁。

最後に、以上三つ目の「庶民階級への学問の浸透」について、この時期の本草学領域において、庶民層における博物趣味の浸透はさらに深くなった。元禄期から流行ってきた園芸（特にツバキブーム）や俳諧の大流行、『訓蒙図彙』などの啓蒙書の普及はウォームアップとして庶民階級の博物趣味を引き起こし、後に近世中期になって、平賀源内の一連の物産会を経て、庶民階級から大名たちまで爛熟した博物趣味に対するアマチュアリズムが盛んになった。また、平賀源内がその代表人物として、文学や芸術などの領域と同じく、本草学においても「連」としての同好サークルが形成され、本草学または本草植物を文学作品や図絵などに取り入れ、本草学を元の医薬の領域から近世の文化領域に導かせた。

三 近世後期の本草学——「実用」と「実証」と「実践」の狭間に

日本の本草学は、近世中期徂徠学の成立による「実学の転向」を経て、近世後期になると、朱子学の形而上学的価値観からの全面的脱却および西洋の実証主義的研究メソッドの導入が自明の研究出発点とされていた。近世後期では、揺らぐ幕末社会の経済危機や、緊張しつつ国際政治関係、頻繁な自然災害、飢饉などの時代背景と相まって、日本本草学はそれらの要素と関係しつつ、前の時期の本草学より多元的な要素を備わっていた。この時期の日本本草学における「実学的性格」を言うと、やはりより近代的な「実学」概念と近づいた「実用」「実証」「実践」などの特徴を持っているのである。そしてこの三つの実学的特徴は、近世後期の本草学において、それぞれ「救荒」「図譜」「物産」という三つの本草学の研究領域ではっきり表れている。

この時期の本草学における実学性格を表す代表的な本草学者として、江戸の本草学者である岩崎灌園と尾張本草学派の本草学者伊藤圭介の両者が挙げられる。この両者とも、「救荒」「図譜」「物産」の研究領域において優れた業績を上げ、互いに一種の「親縁性」を持っていると同時に、ともに前の時代の本草学における実学性格をそのまま継承、あるいは修正・補完の形で引き継いで、近世本草学をより近代化的な方法へと導いたのである。

まず「救荒」について、日本における「救荒本草学」の研究は、江戸時代元禄期から正徳期までの間に明の朱橚の『救荒本草』の伝日をきっかけとしている。『救荒本草』が伝日後、日本で二つのジャンルの「救荒本草書」が現れた。その一つのジャンルは『救荒本草』を注解する著作で、もう一つのジャンルは日本本土の救荒植物を実地考察し、その栽培を試みた上で書いた日本土着の「救荒本草書」である。しかし、日本の「救荒本草学」研究をその最高峰を導かせたきっかけは、天保四年から関東・東北地方に襲った「天保の飢饉」である。この歴史的飢饉に襲われた日本社会では、大勢の餓死者が続出した。そのような時代背景の中に、迫ってくる危機に直接かつ有効な解決策をはかるため、食べられる植物の図や栽培法を記した「救荒書」が多く執筆された。民の苦しみの至急の解決・緩和がその内的原動力となった天保期「救荒本草学」研究ブームは、救荒書の実用性がその一番要請される特徴である。当時の救荒本草書がその前の救荒本草書と区別付ける特徴として、「図入り」「調理法や有毒植物の記事」「自費出版による無償頒布」などが挙げられる。¹⁵

灌園と圭介も、このような実用性指向で、飢饉の情勢を打開するため、それぞれ「救荒書」を執筆した。岩崎灌園は天保七年、園芸ダイアリー『種芸年中行事』を刊行した。園芸書と見えるこの一枚刷の書物は、実は灌園が救荒目的で執筆したのである。本書は一枚刷で、折り畳んで懐に入れて携帯できて、相当な便利性を持っている。また、全書は平仮名で書かれ、必要最低限の漢字だけ使ったため、飢饉の被害対象である下層農民にも読めるように工夫されている。灌園に続いて、伊藤圭介もその翌年（天保八年）、同じく一枚刷の形式で『救荒食物便覧』を編纂し、藩主に上梓した。藩主はこれを見て有用だと思い、

¹⁵ 平野恵『園芸の達人 本草学者・岩崎灌園』平凡社、2017年、94頁。

その板木を借り上げて数千部を印刷し、これを封内尾張、三河、美濃の窮民にあまねく配った。¹⁶『救荒食物便覧』は伊藤圭介が口授し、圭介の門人の西尾泰二と松崎寛一が筆記したもので、六十種の草部の食物と十二種の木部の食物を収録した。食物の漢名と和名以外に、食物の食用部位も記述していて、一部は調理方法や貯蔵手段などをも付けた。最後に、一般野生食物の調理方法と貯蔵手段を簡単に紹介した。

要するに、灌園と圭介を代表に、この時期の本草学者は、「饑饉」という社会的課題に対し、どのように確実な解決ができるかが主要問題である。したがって、彼らの救荒本草書の各面において、救荒に対する「有効性」と「便利性」、つまり「実用性」への追求がその先決である。彼らの救荒本草類著作は、江戸初期の書斎派的な、単なる中国の救荒本草書をもって考証する救荒本草書とはかなり違っている。

続いて、「図譜」という領域について、近世後期の本草学においても、相当な進歩を遂げたのである。本草図譜は、江戸時代のヴィジュアル文化の一つとして、本草学研究において相当な重要性を占めている。その源は江戸時代初期中国から伝来した本草図譜に遡ることできるが、「実学」の意味での本草図譜の画期的展開のきっかけは、やはり平賀源内の『物類品隲』を代表とした商業的本草学による庶民階層の博物趣味の隆盛と、同じく平賀源内の本草図譜上の西洋画技法の導入である。前者は全面的に本草学を昔の薬学書から啓蒙的な博物書への転向を果たし、後者は従来の平面的な本草図に立体化した要素を付け加えたのである。江戸中期の庶民階層の博物趣味の流行は、大名までその影響を広げ、大名の支持により本草図譜の出版数およびその精細さは前の時期よりはるかに上回った。

本草図譜の領域で、江戸期に刊行された二大植物図譜の一つは、灌園の『本草図譜』である。『本草図譜』は植物を好んだ灌園が幼い頃から山野に採集して動植物の彩色図を描き『本草図説』60巻をまとめたあと、若年寄堀田正敦の勧めによってさらに解説を加えて作成したものである。日本初めての彩色植物図鑑として、本書は従来の本草書の「文が主で図が附属」という形式を一変し、「図が主で簡単な解説を付ける」という新しい本草図譜の形式を作り出した。

一方、伊藤圭介の本草図譜上の一番著しい業績は『日本植物図説』と『小石川植物園草木図説』の二冊である。『日本植物図説』は圭介長年収集した植物の写生図に基づき解説を付け加えて編集したもので、伊藤圭介の三男である伊藤謙三郎によって整理されたものである。『小石川植物園草木図説』は晩年の圭介が東京大学の理学部員外教授を担当したとき、賀来飛霞と共に小石川植物園の植物に対する調査に基づいて編纂したものである。この二冊の植物図譜とも絵図が精良で、内容も豊富であって、植物学研究に十分に役立つ資料として、高く評判された。

近世本草学の本草図譜をめぐる社会的要素が多様的で、その中に秘めている「実心」「実践」「実証」の要素の相互的論理関係も相当に複雑である。本稿は紙幅が限られているので、本草図譜をめぐる実学性の検討はまた後日他稿で改めて深めようとする。

最後に、「物産」という領域について、近世後期では、物産学的本草学の発足である享保期と比べ、大きな発展がみられる。日本の物産学は、享保時代吉宗の殖産興業策の影響下で発足し、江戸本草学派による朝鮮人参開発や物産会の開催、全国産物調査など、商業的本草学への転向をその第一段階とし、西洋学者による初期の日本博物誌研究をその第二段階とする。後に、シーボルトの来日および伊藤圭介の『泰西本草名疏』による西洋植物学分類体系の導入からはじめ、伊藤圭介が蕃書調所物産方での出仕まで、近代博物学研究を中心とする時期をその第三段階とし、伊藤圭介が辞任後、門人田中芳男によって発足された近代的物産学をその第四段階とする。¹⁷

¹⁶ 梅村甚太郎『伊藤圭介先生ノ傳』、梅村甚太郎、1927年、5頁。

¹⁷ 平野満「日本の本草学略史—物産学の観点から」洋学(9)、2000年、144頁。

まず岩崎灌園の物産学業績を挙げれば、一番注目されるのはもちろん灌園の採薬記としての『武江産物志』であろう。採薬は、幕府の命による産物調査の目的で、享保・元文年間（1716-1741）に全国規模で行われた。その報告書たる産物帳の執筆のために、採薬記は必要不可欠であった。灌園が著した『武江産物志』の一番大きな物産学的価値は、これまでまだ存在しなかった江戸地域の産物情報を補完したことである。後に、明治六年伊藤圭介が著した『日本産物志』の武蔵の巻における江戸周辺の産物情報は、ほぼ灌園の『武江産物志』に沿ったものである。¹⁸

一方、伊藤圭介は、以上述べた物産学の四つの段階を繋いだ重要人物として、彼以前物産学研究における欠点を見極め、改善を試み、そのうえ、近代的物産学の構想を築き上げた。伊藤圭介の早期から中後期にわたる物産学の諸実践は、享保期発足した江戸物産学の欠陥を埋め立てるという点から見れば、相当な意義を持っている。圭介の早期の物産学業績は『泰西本草名疏』の一書に集中的に表れている。圭介は『泰西本草名疏』において、享保期「和薬開発策」の一環の「オランダ産薬材調査」の過程における「翻訳問題」または「西洋植物に対する体系的認識の欠乏」などという不足を見極め、当時西洋の植物学分類体系であるリンネ分類法を導入し、系統的に西洋植物の訳語を練り直した。その一書を以て物産学上の高名を馳せた圭介は、中年になって幕府の任命により蕃書調所物産方に出仕することになった。当時の物産方は、幕府の弱体化と頭取古賀謹一郎の左遷によって、業務内容はほぼ輸入産物の鑑定や文献調査などという当面問題（物価高騰問題）の解決にのみ力を注ぎ、設置当初の富国強兵の指向や、物産研究機関としての意味合いがだんだん薄くなり、具体的な運営案もなかったのである。物産方のそのような状況を打開しようとして、圭介は「物産学ニ付存寄之趣申上候書付」という長文を幕府に提出した。蕃書調所物産方の新しい運営案ともいえるこの長文において圭介は、物産方の研究環境の整備を図る（書籍類、標本類の収集）とともに、調所の新地を産物の栽培地として利用し、また、蕃書調所の研究機構整備期に新設した諸部門（絵図方、精錬方など）と連携し、西洋科学理論を導入した体系的物産研究機構を目指そうとした。そして、圭介の物産方運営案に構想したのは、後に門人田中芳男によってすべて叶われて、物産学の近代化を完成したのである。

近世における物産学的本草学の歴史を振り返ると、享保期の国外薬材調査においても、幕末の蕃書調所物産方の運営においても、幕府の「実用性」への重視がその終始の特徴である。しかし、このような当面の有用性をひたすら重視するなかで、西洋植物学理論の根底にある「体系性」、つまり一種の実証主義的合理性への無視が露呈する。圭介こそ、物産学研究において厳密な実証主義の精神を持ち、近世の物産学を正しい方向に導かせたのである。

おわりに

以上をもって、本稿は源了円氏の「実学史観」を基本的な視点として、近世本草学の前期・中期・後期における数人の代表的な本草学者を中心に、それぞれの本草学における実学性格を検討した。1607年林羅山が長崎で『本草綱目』を購入することをきっかけに、江戸時代の本草学は終始一つの実学として、日本という舞台で中国とは異なった進化を遂げた。近世本草学のこのような独自の展開を導いた原因は、幕府の経済的危機や政治上の施策、または社会における文化の流行等々、さまざまな側面から視野を入れて分析することができるが、その背後に、終始一貫に徹されていたのは、本草学研究をひたすら熱心に没頭する本草学者の主体側の実学的志向なのである。

近世前期における稻生若水と貝原益軒の自分内面の真実への追求を目的とする本草学

¹⁸ 平野恵『園芸の達人 本草学者・岩崎灌園』平凡社、2017年、88頁。

にしても、中期における商業的実利を図る平賀源内の物産学的本草学にしても、後期における西洋理論体系のレベルでの実証的研究方法を導入した伊藤圭介にしても、それらの本草学者はいつも「虚」と「実」の狭間に立って、先学の「虚」なところを止揚し、自らが臨んでいる局面と環境の中に「実」なるものをひたすら追求し続けた。このような態度は大きな底力となって、新しい文化の衝撃において、積極的に新しい学問を吸収し、創新を求める。彼らの努力によって、元々の中国から発源した純粋な「本草」のなかでだんだんと「本草」をはるかに超えた要素を生み出させ、そのうえ、明治以降の近代薬学・園芸学・博物学・物産学などの新学科に基礎づけをしていた。

言うまでもなく、近世本草学はその体系自体に局限性を持っている。その局限性はもちろん、その理論体系と西洋理論体系の違いである。西洋近代自然科学分野の高速発展によって、細分化した学科分類体系と整った知識体系が備えられた。当時の文化後進国の江戸日本にとって、元来の理論体系のうえ完全に新しい西洋理論体系を受け入れるのは至難の業である。理論体系の相異のことで、当時の日本人が西洋新しい知識を勉強する、利用する時に沢山の困難に直面することになる。日本の本草学は中国から発源して、過渡期における近世本草学は何度も転化を遂げたとしても、その基本的な理論構成はまだ中国に踏襲している。西洋新学科を全般受け入れるなら、その根底から変わらなければならない。

そのような局限性を持っているからこそ、従来私たちは本草学の近代化を検討する際に、往々にして容易く本草学の発展の道を「西欧化」していく過程へと帰結してしまう。つまり、近世本草学の「近代化」を、西洋の先進的な理論を移植し、中国から伝来した伝統的な理論体系を捨てていく過程として捉えるのである。このように「西欧化」の視点で近世本草学の発展を捉えると、近世本草学と近代の新しい学問の間には接続性があまりにも見えにくく、従来の研究では「断層的」という結論に導くのが一般的である。近世本草学に対する肯定的な評価も、せいぜい「近代の新しい学問に豊富な基礎材料を与えた」ぐらいで、その「基礎材料」の内実は全然に見えないのである。「西欧化」の視点下では、あまりにも西洋理論の先進性が表面化され、逆に本草学者たちが臨んでいる社会環境に土着している本草学それ自体が見えにくくなる。近世の本草学における各方面の業績は、近代になってから今日にいたって一体どのような「形見」を残しているか、どういうふうにひそかに自らの存在を示しているか、そういうのは、「西欧化」の視点からも全然見えなくなるのだ。

源氏の「実学史観」は、従来の本草学研究の「伝統から西欧」というパラダイムを打ち破り、「虚学から実学」という新しいパラダイムを私たちに提供した。私たちは「近代化」というキーワードで近世本草学を評価しようとするとき、この新しいパラダイムが従来のパラダイムにおいて見えにくい本草学の事象が浮かべてくる。「実学史観」の視点下で江戸時代各時期の本草学を検討すれば、洋学の受容の面が薄くなっている一方、「実心」「実践」「実証」などの研究傾向を持ち、「漢」と「洋」の間に取捨選択をする本草学者の主体側が浮かび上がってくる。それによって、近世本草学の社会的ネットワークや発展の内的論理関係なども、再び整理することができた。

私たちは、「実学」という本草学発展に下敷きとなっている伏線を掘り出すことで、近世本草学と近代の新しい学問の間の接続性をはじめて見えてきたのである。

(しゃ そこう/千葉大学人文公共学府 博士後期課程)